1982

村上龍全エッセイ

RYU MURAKAMI COMPLETE WORKS OF ESSAYS

1986

村上龍全エッセイ 1982-1986
村上 龍
© Ryu Murakami 1991

1991年8月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3509
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-184967-0

江苏工业学院图书馆
藏书章

講談社文庫

村上龍全エッセイ

1982—1986

村上 龍

講談社

目次

1982

野間文芸新人賞受賞の言葉　13
「パパラギ」でビールを飲む　14
私とTV　19
不意のエロス　21
ビニ本が教える　24
クリスチーネ・F　27
語られぬ「時間」　30
コックサッカー・ブルース　35

1983

だいじょうぶマイ・フレンド——あとがき　129
元気のない少年達の犯罪　131

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

私とアメリカ 135
サイパン＋ビール＝生き極楽 143
関心の行方 144
僕の中の都市 154

1984

「生活」のための小説 159
無敵のサザンオールスターズ 162
自らの闇に向かって 167
エルビス・プレスリー 169
全仏オープンテニス 193
ビートルズは歩みつづける 197
悲しき熱帯——あとがき 199
アメリカン・テクノロジー 200
ロス・オリンピック 205
有吉佐和子の死 210
森永製菓への脅迫文 215

水に遊ぶ　水に学ぶ　220

1985

不思議な絵　317
サバンナ　性のある風景　318
最大の冒険　324
ムパタ　326
基地の街に生まれて　328
アメリカとの四十年　333
最近のミュージック・シーンについて　338
夢のアメリカ・アメリカの夢　341
フロリダ讃歌　348
ジャックスン・ポロック　353
マッケンローとレンドルのレッスン・ビデオ　361

1986

グスタフ・マーラー　365
不穏当な休息　367

都市残留シイタケ孤児 371
快楽のテニス・スタイルブック 374
ニューヨーク・シティ・マラソン——あとがき 388
アルマニャックの思い出 390
ルコントとマッケンロー 392
ナビスコ・マスターズ観戦記 399
ヴァージニアスリムス・チャンピオンシップス 405
地中海の風と光の中で 412
アンリ・ルコントのローランギャロ 419
ベッカーの教訓 426
チェコが生んだ二人の天才 434
早すぎたガッツ・ポーズ 441
日本が韓国に負けたワケ 448
テニスボーイ・イン・ソウル 453
テニスボーイ・イン・東京 460
年をとったらもうオシマイ 477

セックスと戦争——対談・落合恵子 485
快楽のテニス——インタビュー 506
あとがき 513

すべて原則として初出のままですが、本文庫版収録にあたって、題を変更したものがあります。

なお、一九八三年九月より二年間、「写楽」（小学館刊）に連載された「アメリカン★ドリーム」、および一九八六年～一九八七年にかけて「Hot Dog PRESS」（講談社刊）に発表された「テニスボーイ・アラウンド・ザ・ワールド」は割愛しました。前書は講談社文庫に同名書として収録、後書は一九八七年九月、単行本として刊行されました。

村上龍 全エッセイ
1982～1986

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

1982

映画「だいじょうぶマイ・フレンド」の出演交渉、シナリオ・ハンティング、ロケーション等のため、アメリカ、サイパンを再三訪れるなど、映画に忙殺される。

野間文芸新人賞受賞の言葉

書いている時は気付かなかったが、「コインロッカー・ベイビーズ」は二十代後半にしかできなかった仕事だと、今、思う。文章の稚拙さはもちろんのこと、全体の完成度も薄く、パワー不足のイメージは寒々しく喘(あえ)いでいる。

美しく簡潔な文章、作品の完成度、鮮烈なイメージ、しかし私は最初からそのようなものを無視して書き始めたのである。私は、私の作中人物と同様に、何かを突き破りたいと思っていた。

何を？　それは小説という表現と私との関係である。デビュー作と第二作においては、小説と自分との関係を「利用」した。利用することに私はうんざりしていた。一度グシャグシャに壊さなくてはいけないと思った。今、私と小説との関係は破壊されている。ダチュラに見舞われた東京のように、である。

瓦礫(がれき)の向こうには何も見えない。もはや風景はないのだ。そのかわりにうごめくものはある。うごめくもの達は音を出し小さな場所を作っている。風景ではなく、場所だ。私は風景を描写するのをやめるつもりだ。私は次に、場所について語ろうと考えている。

「群像」1月号

「パパラギ」でビールを飲む

某月某日

テニスの後、「パパラギ」でビールを飲む。「パパラギ」のマスターH氏は私の特殊な友人である。特殊とは、付き合いがやたら古いという意味だ。上京してすぐ知り合ったのだから、もう十一年になる。その頃私達は総じてヒッピーと呼ばれていた。私は軟派のヒッピーで、H氏は硬派だった。軟派は、ミュージック、薬、女、が主で、硬派は酒、肉体労働、創造、が主となる。

私達が知り合ったのは練馬にあった木造アパートの一室だった。その部屋は、私の友人の兄の同級生の親友のものだった。H氏は、私の友人の兄の同級生の親友と、飯場で知り合って転がり込んだのである。いつものように私達軟派ヒッピーがラリパッパでドドドドドと押し寄せ女のジーパンを脱がせながらガヤガヤやっていると、すでに布団に入っていた高貴な顔の男が、「てめえら、うるせえぞ、静かにしろ!」と一喝した。その高貴なお顔の男がH氏だったのである。

それ以来、十一年だ。何となく、付き合ってきた。一緒になにかやるわけでもなく、(卓球とかバッティングセンターには行ったし、将棋くらいやるが)だらだらと付き合ってきたのであ

る。

H氏は二十数回職業を変えた。昼間からぶらりと遊びに来て、喫茶店でスポーツ紙の職業欄やアルバイトニュースを読む時は、それまでの仕事をやめた時であった。

H氏はどうしようもない照れ屋なので、その職場で信用されてしまうと、いたたまれなくて辞めてしまうのだ。

H氏の話題は、その関わってきた世界が多種多様なだけに、恐ろしく豊富である。私はH氏から、工事現場の穴埋めやフィリピンバンドのプロモートや猫と観葉植物の運搬や交通事故で死んだ夫の賠償金で家を建て引っ越す妻の態度、などを学ぶ。

また、去年あたり、H氏は小包の配達をやっていた。書籍小包が主だったそうで、世田谷区を担当していたから、私の同業者の生活ぶりなどを面白おかしく話してくれたものだった。たとえば、柄谷行人氏がいつも診察券を忘れて歯医者に行くとか、そんな話である。

そのことをある時柄谷氏に報告すると、「君は私的な諜報機関を持っているのか？」と驚いておられた。

さて、そのようなH氏が、どうして「パパラギ」なるスナックを開店することになったか、である。

事の起こりはテニスだった。H氏は、高校時代ボクシングで国体に出場したほどの人であるからフットワークには相当の自信があったとみえて、私が始めたテニスにいたく興味を示したので

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor